



辻浩和

つじ・ひろかず 1982年、鹿児島生まれ。川村学園女子大学准教授。中世の新興芸能に対する人々の反応を分析し、文化・芸能の社会的機能の解明を目指す。著書に「中世の〈遊女〉」（京都大学学術出版会）。

「芸能史を研究しています」といって「何か芸事をされてるんですか」と聞かれることが多い。残念ながら、筆者には何の芸もない。歌って踊れる研究者は夢のまた夢である。それでも芸能史研究者を名乗るのは、芸能史が芸能そのものだけでなく、芸能を行う人や社会についても研究する分野だからだ。

ロックに例えれば、アーティストはどのような集団・組織で活動し、誰と競争し、どんな生活をしているのか。ライブはどこでどのように行われ、どんな顧客が、どう振る舞うのか。人々はどんな場面でロックを聴き、歌うのか。メディアはロックをどのように語り、記録し、評価したか。それらを調べると、人々にとってのロックの意味や役割が何となく見えてくる。ロックを通して、若者や社会について考えることも可能になる。

筆者はそれに近い研究を、平安・鎌倉時代の芸能を対象に行っている。一例として、奈良の「白拍子」を紹介したい。

1305年8月26日の深夜、奈良・春日若宮の南、新薬師寺

## 芸能史を研究するということ

郷である殺人事件が起こった。山伏の延禪房が播磨公という僧を殺害し、その報復として播磨公の縁者が延禪房を殺したのだ。この事件は、春日若宮の拝殿に勤める「メセ」という女性の住宅で起こったとされている。変わった名前はこの人物は、春日若宮関係の史料に何度も登場し、白拍子女であったことがわかる。

白拍子女とは、白拍子舞を舞う女性芸能者である。白拍子舞は、歌を歌った後に足拍子を踏み回る芸で、12〜13世紀に流行した。白拍子女は「今様」を歌う遊女とは区別される存在だが、売春を行うという点で遊女と同一視されることもある。

白拍子女のメセが拝殿で何をしていたのか。説話集「雑談集」には、興福寺の僧が拝殿での白拍子奉納をやめたところ、神が夢に現れて叱られたという説話が残る。白拍子女は、白拍子舞を奉納して神を楽しませるために拝殿に仕えていたのである。

白拍子女は、巫女や神樂男と同じく拝殿の組織に属し、興福寺僧に統括された。参詣者と神官の取り次ぎをしているので、芸能以外の日常業務もこなしたようだ。拝殿の予算から給料が出るほか、祭礼や神事の際にはボーナスをもらえたりする。一方で、メセは拝殿の仕事と

## 「白拍子女」からむ事件に見る社会

は思えないこともやっている。1307年には僧と神官の宴会に出席。1319年には里人や神人たちが神社の境内に白拍子6人を引き入れて酒宴をしたとして処罰され、メセも危うく謹慎処分になるところだった。先述の殺人事件も深夜に僧たちが集まっていることからみて、やはり宴席で起きたのだろう。メセは拝殿に勤める一方で、職場近くの自宅を拠点に私的な営業も行っていたのである。

メセだけではない。春頼女という「色好み」の家でも神人が酒宴の席で喧嘩をして死傷者が出ているし、「名人の白拍子」と言われた春日金王は、京都まで出かけて貴族や武士の家を訪れている。彼女たちの生活は、職場との関係だけでは語ることができない。

こうした白拍子のありようから、いくつか疑問が生じる。神様は巫女の神樂があるのに、なぜ白拍子舞も要求するのか。これに答えるには、神に捧げる芸能に流行が反映される理由、ひいては人々の神に対する考え方を解明する必要がある。また、男性たちはなぜこんなに酒宴をするのか。当時の社交のあり方と、酒宴での白拍子女の役割を解明しなくてはならない。かくして芸能史研究者は、芸能を通して社会を考え始めるのだ。

◇月1回掲載します。